

## 研究課題別事後評価結果

1. 研究課題名： 局所性・指向性制御に基づく多人数調和型情報提示技術の構築と実践
2. 研究代表者名及び主たる研究参加者名（研究機関名・職名は研究参加期間終了時点）：  
研究代表者  
苗村 健（東京大学大学院情報学環 教授）  
主たる共同研究者  
笥 康明（慶應義塾大学環境情報学部 准教授）  
吉田 俊介（情報通信研究機構ユニバーサルコミュニケーション研究所 主任研究員）

### 3. 事後評価結果

○評点：

A 優れている
---------

○総合評価コメント：

人々が集う場において人々の行動を調和させることのできる情報メディア技術の確立に取り組んだ。研究過程で、研究目標を、個人に籠らずみんなで協調するための情報の共有開示を自然に促す開示性、実物体と融和した情報操作を実現するために物理的側面と情動的側面をバランス良く組み合わせる融和性、一堂に会した場を活用するために空間中で身体を用いた直観的なコミュニケーションを可能にする空間性の3つの柱に絞り込んだ。

開示性に関しては、多人数で感想を共有する技術、グループワークでの対話を促す技術、融和性に関しては、文具や紙をデジタル情報と融和させる技術、実世界にデジタル情報を投影する技術、空間性に関しては、実物体と空中映像を混在提示する技術、360度3D映像をテーブル上に提示する技術をそれぞれ研究開発した。これらの技術に基づいて、精選され、非常に高い品質のデモシステムを構築して、日本科学未来館での常設展示をはじめ多くの場で公に展示し、高い評価を得た。

これからの物理空間と情報空間が融合された世界での多人数インタラクションのあり方を提言し、概念実証したこと、およびそれを支える情報メディア技術を開発し、産業界にも大きなインパクトを与えたことは高く評価される。当初予定の多人数調和を超えて、人々の創造的な行動も誘発するところまで進められたことも特筆に値する。

今後は、このアプローチを産業界に広げ、社会で広く共有されるベネフィットに発展させていくことが期待される。